

Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimeters

	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black											
Blue																			
A	1	2	3	4	5	6	M	8	9	10	11	12	13	14	15	B	17	18	19



• 0 1 2 1m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 JAPAN 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

於 1796

一 柳齋歌川翁畫

曲亭先生新著演
俊寬嶠物語下篇

戊辰季冬
綉梓嗣出

柏榮堂發販

俊寬物語序

俊寬，僧都事蹟，世人往往以為禪柄，噴口不容口，要皆為俗書所誤，而未審其本分。何茅之人也？初，俊寬會羣不逞於其山莊，而謀事也，固琳爲天下銷平氏之虧燭率，此其舉固非義也，且其浮躁不密，機事以取禍，其為人可知已，雖然，當此時平，憲以取禍，其為人可知已，雖然，當此時平，惡迂已穢，大怒，人憤夫孰不可以討其罪。

乃在後寃之所謂非義之義也何以_テ其事
不_レ成而遽_ニ貶棄_シ之耶若称此謂治_ニ義而_ニ
嚙矣未_レ為過言也其適于海島也_ニ在流離
困苦之中而不求媚鬼神_ニ以圖苟免_シ似
知_ル翁者矣但其與成經康賴相決號哭相
吊以求追隨是自兒女醜態豈丈夫所_レ為
哉實為可卑自失志士欲伸太義於天
下者在自盡其心而至成敗利鈍_テ則有_レ
暇計較焉者所以猛烈也後寃有二僕曰
龜王有_レ相俱服事於艱難流離之間不論
其志奔走萬里以護_シ者其主于絕域孤島
中實偉然_{タク}義之士也雖秉彝之性固
不足以異然而方戰國反覆之時苟自非僧
都恩信深得其士心豈能至此哉是又可
嘉也已頃者友人曲亭翁撰後寃物語
祠資戲謔體倣稗史而其要以勵常義
勸懲為頭腦不徒悅婦女以為利名鉤連
書成而屬序於余固不通稗官家言

辭而不許、因述所見以為之序、

文化戊辰仲秋之日

清世閑人撰



俊寬僧都嶋物語題詞

音見半柄核
方知歲星改

鬼鬼天闕薩海濱。烟波憶昔放流人。
浮雲不見長安日。泣向東風幾濕巾。
忽看滄海一下帆開說道天書報赦來。
驚喜唯疑枕頭夢。須臾情定重悲哀。
節使遙來鳳詔頒。主恩還是五一雲班。
何圖雨露今如此。獨自孤臣不賜環。
大赦何因獨見遺。可憐生死失歸期。

秋禽似懇當年恨。日暮啾啾而已廢祠。
右硫磺島俊寬庵懷古詩。七絕共四首。
獲之嚶鳴館集中。

飯台

簷笠隱居

此一書全一部八卷曩者刪一人未全終功故輒其
四卷以發販之而今亦殘編四十卷刻成為全
壁云大約曲亭先生之作碑史也雖取事凡
迫無下義不發勸懲者此編則演正史之遺以
家喻戶曉神出鬼沒而閱者入佳境愈覺快
與世之冗籍不同認印記勿悞拍宋堂識

俊寬僧都鳴物語卷之五

第十一套

抱咎露宿よ
秋を遺一
ゆふよ示す

1

俊寛僧都が事と

曲亭馬琴編次

東都 曲亭馬琴編次
第十一套 抱笞露宿とん 狂を遣し
四よ示す 俊寛僧都が事

捨山まきやまよりぬども。とよくひ慰いだす。取とる傍そばをさへ離はなれて。鳴人なるひとへまゝ腫いぶら
向むかつるむかふ父ちちの在あせの形勢けいせいを。らひす程ほどと痛いたし。ひの漏もだよめやが。夜よ
ともよ物ものを。手てとともさへ。抑おさめ徑へうき康頼こうり。鳴なる山さんへひら
う。熊野權ごん観くわんを。勅清てきせいし。令れいを。誠峯じゆうほうを。攀い。夙ゆ夜よ安やすを。運はび。丹精たんじやう
抽ひきで。祈まとうされ。程ほどよ。神かみを。納受なうしゆ。後あとよ。海うみ落おちす。天あまえ。又またが。兩りょう
友ともの諒ゆうを。聽き。さる。祈願きがんも。やれ。あら。と。あら。笑わら。かへ。誓言ちげん。より。れ。と。あら
う。鳴なるの巣すず。と。り。め。と。專せんせの人の風声ふうせい。を。笑わら。よ。も。朽くす
ひ。そら。実み。す。や。あ。り。ん。細ほそ。く。あ。じ。し。も。と。り。ふ。俊覽しゅるい。れ。を。は。こ。ら。ふ。や。う。ふ
す。年とし。わ。ち。ご。十。の。う。を。誠まこと。が。づ。よ。す。ど。こ。あ。く。ん。賛さん。が。や。彼かれ。よ。物もの。の。憑のぞ
の。係かかり。と。ろ。を。の。せ。の。み。の。と。ら。よ。ハ。愚ぐう。罪つみ。を。天あま。よ。ね。と。う。に。ハ。禱とう。と。か。を。
ひ。う。草くさ。親おや。を。憑のぞ。と。平ひら。來き。を。滅め。と。殘のこ。り。い。く。が。や。事こと
ら。が。あ。を。顕あらわ。し。家いえ。を。與よ。し。す。和わ。び。い。或も。配はい。流ながす。れ。或も。い。首くび。を。刎はら。れ。い。エ
か。痛いた。く。草くさ。と。ひ。く。ら。ひ。く。敗ひき。と。と。を。や。う。ざ。り。さ。が。苦くる。と。死死。と。
神かみ。よ。も。祈まとう。と。仏ぶつ。も。歎かな。を。ま。り。べ。し。凡普。夫ふ。の。媚めい。神じん。を。説説。び。く。い。く。ト。罪つみ
禍まことに。さ。れ。よ。る。事こと。經きよ。廉れんれ。の。ミ。を。説説。す。一。あ。り。神かみ。も。人ひと。よ。私わたくし。と。り。ん。
入い。が。く。そ。の。非ひ。を。あ。く。が。只ただ。悞まぬ。を。改か。る。よ。ち。く。だ。成な。經きよ。へ。え。其その平ひら來き。よ。由ゆ
教きよ。み。ひ。く。が。熊野くまのの。神かみ。も。光ひかり。を。ナ。ア。ト。僧そう都つ。が。ゆ。う。工く。を。る。か。く。ふ。は。清きよ
鹽しお。ス。く。怨うら。を。と。あれ。べ。て。往むか。す。二。然ぜん。也よ。を。祈まとう。す。が。あ。よ。の。あ。く。だ。く。ま。き。
病病。の。ひ。ぐ。く。愈い。べ。た。ひ。よ。醫い。師し。の。功ご。を。り。よ。う。の。ヌ。ト。晴は。く。ま。ダ。ゲ。ル。マ。夫ふ。天あま。の。地ぢ

さる薛ふへるを追へ。さがうむむちる薛ふへ逃げ。北野の神のあんせつ
さろざよ。何んの道ふるひるが。わくぐくとも。わくすらん。おくれ
ちく。寃枉を脱とあぐべ。況名利のあよせと乱さんと計略。されど
相語れ。微生か橋梁の信を盡。その職もやうぎよ。兵士と肩と
比攻伐合戦の隠謀よかじい。是うまくもぐく。釀せし禍。前世の恩讐も
今生よ脱も。あくれば今生の恩報を。へう生よ果せりと。辰巳は頼む。
絶く歎くゆふと僧教の常よ宣ひた。まくべ事より行ともりへ努力天をも外ら。ど
人をもかくもあふなと町寧よ説示。種あれアレ。とうもやうく父の志へ
あくあくとも。その妻そめよるなり。天命とて父の流罪を歎き慕
ぐ。乍らべた母の前今般の送言よ。シテ禮ハ薩摩の方。恩界鳴よありと志
を。追薦わざる。続徑もちる。朝の雨。梳也。夕霧又宿を投め死所があり
て父上の安否をも問ひ。恙る。面新を。とてやうかとす。母が子よ善知
識の回向よ。さくは。仙果をゆくぶんぞ。と宣ひ。うき聲ひ。の耳底。よ聞と
が。今。父をよあかう。かえ女又母のと。又結髪ちゆひ。脚
きし。曹司のふをよへ。出と。後。嘲とも。徳あよ。其の身の悲しみ。恋と
うふのまよ。鴻。うぐいす。わく。安良子をねく水に。黒の扇。三郎が
歌をよのこ。ゆき。すす。月を。約つむん。それを。爹くよ。よ。よ。と。仇をの
釋ふと。遙。す。ゆ。ひ。その消息を。改善の中よ。往くとして。まつれど。又。上も
姉。ゆ。あ。か。立。よ。う。た。入。と。す。り。あ。が。雅。よ。う。う。と。ちん紀。念。と。そ。今。化。う。れ。と。れ。る
く。忘。う。隣。も。ゆ。う。ね。べ。と。に。順。え。袖。り。う。す。よ。ス。と。う。あ。ん。油。か。よ。る。一。列。
主人が枕方よに。と。び。さん。や。九。州。よ。う。果。子。夥。准。協。し。委。よ。を。く。ま。せ。ん
の志を。果。よ。う。と。と。び。さん。や。九。州。よ。う。果。子。夥。准。協。し。委。よ。を。く。ま。せ。ん



て齋へとれど。それも半ひがま又入れて。蟻王が撃つて。よもやまに。わうりや
すと懐をうい拂う。うれもうちんゆくうべ。とりひく包うち戻く。重
疊紙わ枚原のねむかわく。橋を懐すう。陸廟よらやく。孝子の心わ
紫。謂籠。桂ひ。加久繩のり。ア背も届原を。御羅よあじ色精。キ巻石
巻巻向の。子果子を傍殺り。よもやま取らど。只あやしくよもやま。宿を
えり。と月歎。脊そくをく。窮屈し。見好意。豪。けれど。カ穀。ごも。口へ
えらぬ。浮世よをれ。鳴人か。かう。黒子をあらうとも。脇よ熟されば。か
ある。がく。されへがん。お稚乃く。たゞぐの餓を。參め。生を寧め。幸
不幸。さくづく。中よ。都會繁花のむ。生きて。ある果子を。えぞ。骨とせ
ざき。かう。えと。嶋さん。ご。住む。山の端と。潮煙よ。雲が。ある日の見え
ず。がく。よど。巌山の雲の。目標よ。四の時。脣と。りふ。めの。よ。されば。月。日。月。宵
の影をえら。す。一月の果子を。數へ。極り。笑ねど。八重霞ゆる。厚が。と。目送す
る。脊と。う。暑。堪。ぐ。と。絆を。寛め。と。定め。と。禁。う。傷
と。う。親。く。物。う。う。大。れ。言。葉。も。耳。う。れ。ア。治。の。人の。は。う。う。と。う。時
と。う。い。し。寛。よ。り。ん。身。ひ。年。よ。仙。が。あ。く。の。性。怜。憐。生。と。れ。が。へ。も。憐。と。く。後
み。あ。を。も。揚。身。を。ち。立。あ。ふ。ベ。う。れ。ど。か。う。ド。く。ら。笠。提。の。道。か。う。け。へ。く。み。利。の。出
を。く。う。れ。あ。く。う。う。天。堂。よ。剣。を。あ。う。と。凝。ひ。う。と。鏡。示。で。バ。徳。あ。た。と
喜。け。う。う。叮。嚙。よ。ほ。え。あ。う。と。う。と。う。も。頬。く。れ。わ。る。ペ。ー。と。う。う。
う。う。恩。界。が。鳴。よ。ん。鬼。う。鬼。り。華。洛。よ。あ。ん。と。明。る。い。舊。の。信。ふ。と。動。

とちやうかう。うつて。隠王を赦ひよとべ。がよひん。おさるがたよ。「言を
きよ。情をうそ。勧解こと。とくとおの。親ちかの御腹よりぶらに駄脚駄を足も
と稀ひ。そのみゆは細よ及び。鳥人の愚吏り。利害を説く。うその意
をひきう。あが慚愧して。ゆく。彼人を放せよ。むすうれと。意して。本の意の
うをくる。と。坐む。わらつ。天うち瞻め。月から。頃ねくよ。夜のく。東北と
あが。まどを疲勞ひひりん。られ枕よと。あむる。艶の貝のた。親のありと
ころ。告ねがちく。浪の音響。ぐ。魂を消す。う。旅寢。も。憂も定り。よ。経。ざ
ぐ。眞まく。心の空きと。と。徳壽なり。枕引く。と。心。目睡。あひく。俊實。睡。真
まく。う。と。寝。まく。童。今。茲。か。十。オ。よ。う。りん。長。女。も。立。よ。
「ハ。す。べ。宣。よ。う。れ。が。举。止。の。健。ま。う。る。常。の。童。う。り。う。が。傳。世。の。憂。を
あ。う。う。あ。う。と。永。製。の。鯉。魚。雪。中。の。竹。子。親。み。優。方。孝。行。を。憐。が。神。り。は
ま。う。と。と。名。告。う。よ。う。の。難。く。あ。う。ね。ど。名。告。う。と。む。う。う。と。ご。親。子。先。よ
う。命。へ。と。貞。を。義。く。や。強。顔。を。羊。の。意。よ。精。く。う。「哀。恨。く。う。い
う。う。只。曾。縁。く。う。え。む。う。れ。ど。小。夜。の。中。山。よ。あ。り。く。う。そ。間。の。釐。の。撞
ね。よ。う。父。か。の。苦。く。う。饑。寒。道。よ。の。身。を。あ。ひ。て。那。由。院。阿。僧。祇。の。山。蛭。が。
身。體。よ。蟲。と。う。著。く。血。を。吸。竭。一。穴。と。暗。す。も。百。倍。も。く。も。み。す。と。す。と
放。く。う。と。三。界。の。絆。く。も。因。ひ。縁。よ。捕。り。れ。て。呵。責。の。簽。杖。よ。う。懲。され。
終。よ。と。の。鳴。よ。捨。ら。れ。と。三。入。が。中。よ。二。入。赦。され。憲。う。る。私。の。縊。よ。う。懲。され。
と。推。ひ。著。く。よ。引。き。と。極。刃。を。轉。ひ。怒。ひ。悲。歎。う。今。恩。愛。の。鸕。よ。う。れ。と。弘
誓。の。私。よ。乘。後。れ。年。來。延。へ。と。彼。岸。到。ら。う。隣。の。中。流。の。流。轉。生。死。の。際。ふ
ひ。愛。情。の。奴。煩。惱。の。狗。と。身。を。う。と。憂。と。苦。と。ま。菅。家。の。詩。み。ち。業。年。が。承。ま
る。う。と。う。あ。う。う。と。と。承。足。う。と。う。あ。う。ん。が。う。う。ひ。が。う。う。う。う。う。

さもすまうたる案の前かひ烈難彼ニ即經房を輕々取て娘父牛龍を
の仇を報。その身かすゞく自殺。まことよ徳善が母ありり。又と憤れ
の鶴のあがとそり。結髮より牛若丸より「夜か添臥せど底より投」
硯のぬよ筆の命乞涙。墨乾てぬ鳴つ鳥迹の鬼界よよどり。
今も主あた玉章も形見よども。と枕方ある。書筒りのとて封皮り。剪
月を燭よ続り。どかか手迹憂ふたむす。書の渢よ毫を乞ひてや。とふり
きりの書がり。大悲山の慄麗。年老の寓居。蟻王夫婦。それが圓覺姫。う
心抱せられ。日れ終日。葦の宿の壁よ附ひて泣幕し。夜の終夜。光細き燈よ
附く。後わく。びりくよ。母里あ俄頃。すくねり行とあらすら
ん。オがとくと。書くと。便宣よ鳴を。密よらんのが。あれり。と
書くと。続く一巻。顔よ當。声を忍び。絶えまじくよ泣あふ。與く
涙を押おへ。亦彼隻袖を。あようて。あくらを。うちば。またわよ。痛の裏
よ。福壽海と。量大妙と。書つて。鶴の前の法名す。べ。宴みへの身の
墓あた。壽福を。鶴龜の齡ひ。擬す。ものす。あづれ。生あるもの
必ずえあり。生て死。死て生。生るよのわれば。と。世よ親子と。ああ
みやめく。ま年の落花が根よ帰る。今年梢よ。昇りのあく。槿花の盡
か短い。と。老樹稚樹の差別。残の蘋と。あるみを。喜怒哀樂。う
羈きよ。歎く。思癡の至す。妻子珍宝及王位。臨命終時不隨者。
と大集經よ。も。続れ。それ。愁よ頑負の。息あれば。と。物を。し。かげり。
て最期を。りそん。曝く。牡蛎の殻を拾ひ。竹の杜。二首の詩
を書送。流本の杖よ握り。ふぞく。ち。出。ふ。と。曉方の礪山下風。
と負よ入。従。また。ぬ。身。と。目を。覧せ。が。主。へ。崖の内よ。呴らせ。行。

めりん。不審にて身を起し。彼此をえぐるわざと岩屋みのうに通じ
蟻王に主を慕ふてあすむ。徳あれを遙よんとどんづつよとぞ
ま。徒送よもぐの善さんを説びゆえ。とて蟻王がちうてやう。某一旦、蟻
人木か意よ住へて練られ。さゞへ理を鶴へと歎たへぶ。彼木さく
みれを憐き。遂ニ傳をとてゆりて物食でさよくよ歎待とづむ。孺
君のうへひととなり。すそを答屋をそくま通宵跡を慕ひてごくへ
あり。すそも仔がくい。とて賤會ゆひ。竹人よ秀ひとてとの處す
宿りあひよと向よ徳あたり。ありしその一五六十を物ぐらうものかよ。蟻
王すく不審ミ不圖。右邊の柱をえつゝせ。

えせもやみかれとぞふくともゆくとひとうもひ苦の岩屋を

とあり。牡蛎壳をとよ。書つてこらばくと出よ。まよるかのとまよ
紛あぐもあくね。僧都のよ迹す。まよる。岩窟の主人と。僧都と
在へられ。ちとけり。と徳あたり。すく呆れて。彼歌をとえやすら。
れもく。あく。又うべーと。精く。かきまじり。今うう二歳女に時
をも。うれ。楚と。徳く。がん形容のりとり。うち。朽朽ゆひ。欺き
ありて。本意遂よ。と遺憾。うれ。うれ。よせんと。頗よ後悔。あへ
蟻王懲めと。うく。僧都あく。羞す。厭きゆふ。かの鳴う。外へ
おう。秀ゆ。と。うす。べー。と。そ。と。主徳連忙。うち。是首
彼首を素めぐる。狼打障よ。杖と木のはり。編くる。履めり。徳劣
ゆがす。されをえよ。と。うきのよ。ふ。又の携。あつ。杖穿め。履め。さく
自。投。あ。うん。と。ひ。も。黒。底。底。泉の涌。が。下。蟻王。ち。又。されをえ。と。日
を。う。ス。あ。う。と。う。と。う。且。うち。底。万里の波濤を。辛い。嘔て。主徳と。參れ。行のなが。



僧都又再會のをを遂る。ひだりの右脇を盡さんと只ひづれのを公はれ
ちどり。居て底の大魚の腮みゆくあらう。天わく主従が至る所
孤忠ちうしやうん幻の境よ画新をえせう。只一言に蝶王とも徳ある所
ひてよ。あはまくべたすりと叫つほつ忠臣孝子がくをとりあふくを
に後哀傷すくさうり。實ふやとの如い鬼界が嶋とまくられ。鬼の集
るところ。今生きの冥土より。親子の一の契とば名告ゆふ懶があ
らまじ。せむすへした迹吊ねくとく。主従練め練られ林と屢を携て
舊の嵐ふゑう。件の二品を埋め。墳墓小筑すに辞世の号をもす。あ
い。サの柱を建て。卒歿は姿よ換。小松を栽て墓標とえ。小松今もは繁
茂。千載不朽の古迹とすりぬ。やまと徳美丸へ蝶王りゆくも又の住
をとあひ。嵐の中よ起臥。毎日よ墓を掃淨め花と折水を手向
る程よ妙なる前の亡日よあひぬ。うそく像見の隻袖を。小松の枝ようち被
ふ。念佛百遍ぢうり唱る向よ怪しきよ。この月の浦風よびうるよ。忽然
うそく彼袖を。雲井送よ吹揚つ。翻翻うそく東へ廢し。飄くとて天荒
鳥よ仰くしう。徳美丸へまく。蝶王か眼前の不思議をえぞ大驚
た。それを追ふよ。その落う不をやう。原末鶴の前の亡魂。彼袖よと
うり。が主従よ先へまく。東へゆくあらう。結髪の君を慕へ
ゆく。それよ。宴よ貞女の節操。その憂苦よ堪め。生うごく石と化す。
元へ。後よ子を産むる類。和僕よその例。うそく。うそく。うそく
つる。解芒指。しよた魂よ。一隻の袖を失ひて。つる。あはれた主従が四
秋を闇へ。うそく。うそく。徳美丸へ父の効月忌も果ふ。れば蝶王とも
硫黄商よ便取。八月の下院よ大隅ある。畔の瀬内よ泊着。十月の中

自。身。後。ち。く。ゆ。り。來。と。れ。ど。も。寺。谷。へ。教。化。あ。ん。す。る。き。危。う。べ。と。蟻。王。
か。う。え。よ。に。し。主。徒。遂。よ。越。前。國。水。江。の。庄。よ。い。か。ん。く。黒。居。二。年。を。落。ふ。よ。
家。の。背。よ。う。く。ね。ど。ぬ。へ。二。年。己。前。よ。自。殺。一。度。と。見。住。人の。町。寧。よ。鏡。
あ。か。う。ぶ。蟻。王。へ。う。よ。も。あ。て。又。か。最。期。の。景。迹。と。是。龜。王。渡。海。木。が。縛。の。題。
と。審。よ。う。く。方。よ。發。う。た。且。失。恵。の。悲。き。堪。む。徳。事。た。む。ぶ。う。よ。う。ひ。
き。ぐ。僕。や。く。み。み。び。ん。よ。物。う。す。ぐ。蟻。王。と。ち。よ。黒。居。が。墓。よ。落。め。ふ。う。
蟻。王。り。わ。う。よ。物。を。落。ひ。る。よ。ス。ト。く。父。よ。信。さ。し。懐。を。協。戦。た。在。る。親。小。物。
り。か。ぐ。く。紀。と。鏡。と。理。す。れ。か。エ。ト。く。が。ま。徒。れ。憑。ひ。樹。わ。よ。雨。と。偏。と。水。
え。み。も。齒。と。ぐ。く。彼。此。よ。立。た。お。び。つ。終。よ。吉。田。郡。大。日。山。の。南。す。る。山。里。よ。
隠。と。住。を。う。る。條。の。風。声。を。笑。そ。ん。と。暮。し。よ。され。
あ。く。ら。く。固。く。籠。と。よ。因。於。又。木。芽。山。顛。と。陽。尾。山。顛。の。向。よ。内。山。と。り。岳。あ。
名。不。レ。シ。れ。か。又。蟻。王。が。經。経。と。故。ゆ。へ。帰。し。し。る。を。山。の。名。よ。負。せ。き。ん。
と。り。ふ。経。わ。う。水。江。の。庄。ひ。り。の。郡。よ。屬。す。や。今。詳。す。と。序。ゆ。う。が。
ス。キ。と。
彼。國。の。人。よ。う。づ。ね。へ。し。

第三卷

抱。脚。揃。臂。と。の

篠。よ。夢。ひ。之。

案。山。四。郎。グ。リ。

永。を。亡。セ。

明。享。二。年。治。承。四。年。夏。五。月。の。比。越。路。の。良。賤。風。向。を。さ。そ。も。治。承。源。
三。位。賴。政。入。道。法。名。賴。因。蓮。華。寺。と。号。モ。そ。の。子。仲。綱。朝。臣。又。子。賴。不。
平。家。を。怨。る。と。あ。つ。今。茲。五。月。十。二。日。三。條。高。倉。宮。以。仁。親。一。日。脚。
隠。襍。と。勧。め。走。しが。そ。の。又。忽。地。平。家。へ。吹。え。と。豫。す。計。畧。令。明。ア。
賴。政。卿。ハ。一。族。と。ろ。ふ。宮。の。守。護。し。南。都。を。投。と。く。退。く。又。日。
宮。を。さ。り。く。疲。勞。生。き。ひ。く。四。と。び。五。と。び。瑞。馬。と。ひ。一。ヶ。姑。く。宇。舟。

平等院より入る。橋を三間渡り、殿へ寄りて歌を禦んとす。
時より五月廿六日。平相國清盛入道勅をあり。左兵衛督知盛、ノ
頭重衡を追付使とす。相從ふ一族郎従十餘人。その勢都合二千餘
騎。宇治川の河岸に立聚ひ。矢軍より時をうつて移す平家六
舟を傍えんとす。水より漏るゝ軍兵かくそだ。されば仲綱朝臣。

伊勢武者八
兒^ニ 盛衰
又作^シ白

三子大をどうの體焉と宇治の綱代又

やうとひる哉と。殊く欺をなすひる。平家へもぐく軍兵をまつらすと
を。安うよ。かねえすが。足利又太郎先陣と。その後二百餘騎。向の岸へ
さくめけあづて攻戦ふ。早雄の兵等。多く劣らじ。とく勝て
ぐんへりまき。りと。桃と戦ひ。そばに唯雄を決さし。よ。平家へ目と餘る大軍
源平入乱。多く。多く。狩も。物ともせど。頼政卿の既よ軍難矣。よ乃びて今
へやうとひりひれべ。あづて平等院へ引退ひく。
ひれきる
ひれきる

埋木の花さくすすむなりふるのま黒もあら
うき

埋木の花さくす。ひるじふまのる黒とあられへり
孫もあり。ど。腹を切てぬ。ものとれ。頼政の郎黨。下總國の住人
下河辺藤三郎。清恒。主の首をうたは。直垂の袖よ包み。板敷の
上板をほん破りて。それを隠して。盛衰記并々長門本
私家物語本の説
みれ敵よ搜一出生さる。と。りやとそ。遠江國の住人。猪隼太守資
彼下河辺と相謀る。頼政卿の首と。板敷の裏うち。
禮の袖よやく。りうち。乱軍の中を逃走す。
下總國よ。諸く。古河のほうへ。主の首を埋葬する。その後
猪隼太。う。子孫。古河の近江に在住。遙星。霸を称す。武義
岡崎玉郡。大田の庄よ移住をとひ。その地へ今。の川口村これより

ありやうぢやあ
此一類放ありて。弓が完
周よひ。宝永享保の間。浮世繪

めでセヨモ
ハ併紀の。
すうじゆ
きんじ

族あく。祖又の爲み。叔又あり。字も。兵五郎。三同と号も。壯士
珍重のさへ繪ある。印れ。乃の草。墳墓へ江戸
曆四年七月廿二日没。下谷地の端。東圓禪寺より。

武者物縁云々。賴政卿

私云々

清恒。猪隼太守。又對々。乞
賀。ホトトギベし。又對々。乞
袋。又入。猪園を後
め。其へ。里よ。そこ
が多べ。

下河邊

を頂よぐ。諸國を編

おもて。おもて。おもて。おもて。

かう。そじすもとひく。
あぐら。まよ遺言の空
やいごん
まよ

トヒ。右ノカニ。

村の近所より白骨をもたらす者あり。其勢
甚しき。城内より而て彼塚のあ

電を締び

嫡男仲綱又自殺を因幡國の住人。弥太郎盛萬主の首を取る。頼政の首とさりて隠れてゐたが、人目をもよび、後日よ竹格子の下に血の流とあつたるを怪し、御堂を開くと死んでいた。死骸ありて、葬行人とりて身を洗ひ、後もこそ仲綱と見えていた。盛衰記の残文と見て、壁をうち放てて死人の首一級ある。元仲綱、叔父死後の門とく今すゆ。長門本平家物語の後又盛衰記の自害の間とやうりと云ふ。馬琴云長門卒死よされば、仲綱の首をば携てて墓の邊に立てて、即ち馬琴の墳墓に立てて、美濃國山縣郡よあへと十四巻の系圖よ見えよう。

軀を埋葬する如キ。の日討死の一族郎黨等、所理仲綱朝
臣姫政の子肥後守宗綱、左エ門尉兼綱。賴政の孫子六
家。賴政の養子木曾仲の兄弟。その子義人太郎。又餘家徒の家臣よ至り。
毛举よ追あつた。官主を辛じく。平等院を落させたり。光明山へ
かうせゆ間々流矢矢。軀を射させ。忍也馬も尋ねひぐ
飛彈判官景高が郎黨落合。猿くに首を切り下るとぞ。抑
賴政をさひひしき。軍あらそ。その家ひきまへ。一族郎黨悉殺せ
加之高倉宮をもじろり。とその比入のひみとど彼宮の令
命ありしよ。猪國の源氏蜂起。平家の終焉び矣。賴
政ひきせ。賴朝といふも。往々伊豆の犯所。老死志めんゆゑ。彼
ぞ成とあざる。天く。命あり。賴政。賴朝。又の武勇は干ての更ニ申

新編
曲序謹

新編
曲序謹

